批評・紹介

大唐西域求法高僧傳　足立喜六譯註

昭和十七年五月　岩波書店發行
A5判本文二五四頁　價四・〇〇

『大唐西域求法高僧傳』二卷は唐の沙門義淨がインドより東に歸つて室利佛逝に滯在中に著したものであつて、撰述の時期は六八九―六九一年と高楠博士によつて考證せられてゐる。その内容は、唐の國初以來撰述の時までの間にインド・西域・南海に赴いた支那や新羅の求法僧たちの消息行狀を義淨がその旅行中に或ひは親しく會ふ所により、或ひは傳聞する所によつて書き記したものである。なほ間々義淨自身のことにも及び、外に那爛陀寺の規模についての詳しい記述がある（これには元來繪圖があつたものが現在は佚して傳はらない）。記錄にとゞめられた求法僧の數は五十六人に上り、さらに『重歸南海傳』として四人の僧侶の事蹟が附け加へられてあつて總計六十人となる。

この本の價値については、足立氏は「支那佛教史・東西交通史の資料として、また佛教文學の精華として、本書の價値は法顯の佛國記・玄奘の大唐西域記と共に支那の縮徒の著せる世界的三大偉著と稱すべきものである」といふ。それほど高く評價することについては、なほ議論の餘地があるとは思ふが、それにしても、支那の求法僧たちの手になる紀行・地志の類の中で、法顯傳・慈恩傳・西域記の三者につゞいては先づ指を屈しなければならないものの一つであることは間違ひないであらう。

この傳記集の内容が粗雜であると說く向きもある。法顯傳の猛健な文章や西域記の度が過ぎてゐるとまで思はれるほど整理雕琢が加へられてゐることに比べると確かに粗雜である。ことに傳記や地理の資料として用ゐるには、いろいろ不都合な點もあらう。しかし、當時の求法僧たちの異鄕に於ける生活ぶりといつたやうなことは、本書によつて寧ろ一種のなまなましさを以て傳へられてゐるやうに感ぜられる。

譯註者の足立翁については、さきに私は本誌第一卷五號に、「考證法顯傳」を紹介した因緣があるのだが、一昨年その補訂版が出たのを、まだ紹介もしないでゐるうちに今度の本が刊行せられた。翁の壯んな意氣には感服の外はない。

今度の本は『大唐西域求法高僧傳』の本文に段落を區切つて、一節ごとに譯文・註釋をつけたもので、これに『義淨法師西游年表』、索引地圖などが附け加へられてある。本文は宮内省圖書寮藏の宋紹興戊辰年福州開元寺版藏經本に據り、これに返り點が加へられ、譯文はいはゆる訓讀書き流し體が用ゐられ、

註釋は字句の解釋、とくに支那の古典並びに佛典に由來する故事熟語の解說、固有名詞の解說、その他の考證が主である。解說は非常に懇切叮嚀であつて初學にも近づき易いことはその大きな特長であり、この點は譯註者の勞を多としなければならないと同時に、元來は數學物理學を專攻せられたと聞いてゐる譯註者の漢學・佛學の素養に敬意を表する次第である。

斯くの如く、頗る念入りの勞作なのであるが、微細に入るに從つて誤りの生じて來ることは、全智全能ならざる人間の仕事である以上、已むを得ない所である。さういふ單なる讀み違ひや解釋の誤りを別にして、全體を通觀するとその譯註の態度に二つの批判すべき點が見うけられるから、そのことだけ申しておきたい。

その第一は本文を最上のテキストとは言ひ難い開元寺本に據つて、しかも之にこだはり過ぎたこと、第二は文學的修辭を强ひて合理的に解釋せんと試みた場合のあることである。一二の例をあげよう。

全篇の總序にあたる條の「獨步鐵門之外、互萬嶺而投身。孤標銅柱之前。跨千江而遺命。」なる句の標を、他の諸本に標もしくは漂に作るのを訛とし、この標は「拋にて身を捐つなり」と解され（七頁）、「孤銅柱の前に標ち」と讀まれてゐる（四頁）。「孤標銅柱之前」の句は「獨步鐵門之外」と對になつてゐるのであるから、步の字に應ずるものとして漂とするのが妥當であらう。大正藏經本の校記によるとその底本—高麗本—は漂に作り、宋本・宮內省本は標に作るとし、譯註者の言ふ所と相違してゐる。大正藏經の校記を誤りと見ても、「身をなげうつ」とよんでは意味が通らない。

次に、常愍（愍）禪師の條の「解纜未達、忽超滄波」といふ句（四九頁）も意味が通り難く、高麗本に從つて「解纜未綱、忽起滄波」とよむべきであらう。また本書に常愍を常愍に作つてゐるのは、唐代の本に國諱を避けて愍としたものに開元寺本が依つたものと察せられる。從つて高麗本・磧砂本などに愍に作るのが正しいとせねばならないであらう。

このやうなのが開元寺本にこだはり過ぎた例の一斑である。他の諸本との異同が註記せられてゐる場合もあるが、またさうでない場合もしばしばある。勿論、開元寺本にも高麗本に優つた點はいくらかあるのだが、概して前者の方がよくない場合が多い。それを開元寺本を固執して强ひて訓みをつけるといふ態度には贊同できない。

第二の文學的修辭に關する例では、玄照法師の條に「以九月而辭苦部、正月使到洛陽、五月之間、途經萬里」（一一頁）の句に註解して天竺までの里數を勘定した如き（二八頁）、全く無用の業である。

同じ條の「於是重涉流沙、還經磧石」の重を解して玉門關の西と于闐の東と二度流沙をわたつたといふが、これは、一度通つて來た流沙をまた通つて印度へ向つたといふ意にとらねばならない。さうでないと次の還の字が生きてこない。

もつとも、この第二類の場合は註釋だけの問題であるから、讀者が少し氣をつければそれで濟むことであり、本文や譯文にはさしさはりのないことである。

この兩種の場合が組み合はさつて面倒な間違ひを起した例がある。それは、卷下の義淨自身の渡海を述べた條の「至十一月遂乃面翼軫背番禺指鹿園而遐想望雞峰而大息、于時廣漠初飈向朱方而百丈雙桂離箕創節棄玄朔而五兩單飛長截洪溟似山之濤横海斜通巨壑如雲之浪滔天未隔兩旬果之佛逝」(一三八—九頁)といふ句である。これは「義淨が雄大なる詩想を凝らした全編中の名文」であるとなし、特に次の如く節解して讀まれてあり、更に數頁にわたる註解が附けられ、全編を通じてもつとも苦心が拂はれた箇所のやうに見うけられる(一四六頁以下)。

面翼軫
背番禺
指鹿園而遐想
望雞峰而大息
……解纜の感想

于時
廣漠初飈向朱方…信風
而百丈雙桂離箕…天象
……出航直後の情景

創節棄玄朔……氣溫
而
五兩單飛……舶上
長截洪溟……進行
……洋上航海の感興

似山之濤横海斜通巨壑…沿海
如山之浪滔天未隔兩旬…行程
……沿海の情況

果之佛逝……到着

しかし、これは開元寺本に誤字があつたり、翼軫・箕・玄朔などの語の解し方が妥當でないために、このよみ方は誤謬に陷つてゐる。足立氏によれば「古來の句讀に誤謬が特に多い」(一四六頁)とのことである。古來如何なる句讀が施されてあつたか知らないが、大正藏經の句讀(これには返り點はない)は一向まちがつてゐない。今、これを同じやうに節解すれば次の通りである。

面翼軫。
背番禺。
指鹿園而遐想。
望雞峰而大息。

于時廣漠初飈。向朱方而百丈雙挂。
離箕創節。棄玄朔而五兩單飛。
長截洪溟。似山之濤横海。
斜通巨壑。如雲之浪滔天。
未隔兩旬。果之佛逝。

足立氏の誤りの生じた第一の原因は、開元寺本に「百丈雙桂」

とある雙桂にとらはれて之を月の意に解し、それに次の「離箕」の二字を附けて區切つたことにある。しかしながら、この桂は開元寺本の誤りで、挂が正しく、百丈とは篋纜の意であつて、これは私の節解に明らかな通り「五兩單飛」と對をなす句であるから「百丈ならび挂く」とよまなければならない。從つて、「離箕創節」が一句になつて「廣漠初飈」と對をなす。離箕とは、尙書洪範に「月經于箕多風」と見え、春秋緯（周禮太宗伯疏引）に「月離于箕、風必揚沙」と見えることより見て、こゝは「廣漠初飈」を繰返して「風が吹きはじめた時」と言つてゐるものと解せられる（離はカカルと訓する）。「棄玄朔」を氣溫を述べたものと解するのは失當で、これは「向朱方」と對して、さきの「面翼軫背番禺」（この翼軫を天文を按じて精密に記したといふのも妥當でなく、單に「南をさして」と解すべきである）と同じことを繰返したものである。

結論として、この本はその根本となつたテキストがよくなかつたため――この缺陷は致命的である――と、讀解に間々妥當でない點があるために、『大唐西域求法高僧傳』の標準版とはなし難いものであると言はねばならない。譯註者の拂はれた勞力が多大であつたらうと思はれるだけに、一層遺憾である。足立氏がさきに著された『法顯傳』は詳しい校勘記がついてゐたから、とにかく利用し得た。今度のものは「高麗本」と「黃檗本」との異同の幾つかゞ記されてゐるにすぎない。『法顯傳』の場合ほどの煩勞を敢てせずとも、譯註を施すにあたつて、たゞ大正藏經本を底本に用ゐて――この方が圖書寮御藏書を底本とするより遙かに手輕であらう――その句讀の誤りを匡しただけで（なほ事情が許せば校勘の不備をも補へば）、それが學界に占むる位置は今度の本とは比べものにならなかつたであらうと惜しまれる。

〔藤枝晃〕

金帳汗國史　蒙古研究叢書第二

A・ヤクボフスキー　B・グレコフ著

播磨楢吉譯

昭和十七年三月廿日　生活社發行

A5判本文三九九頁　定價五圓八十錢

過去に於けるロシアの東洋學が、蒙古學研究の上に如何に偉大なる足跡を殘したかに就ては今更改めて說く迄もない。而も此の傳統は最近のバルトリド、ウラジミルツヲフよりポッペ、カザケヴヰチの現在に至る迄、依然として維持されてゐるのである。然るにも拘らず、其の言語の特殊性と書籍の稀覯とに阻まれて其の成果の利用が我が國に於て兎角等閑に附され易いのは、事情已むを得ぬとはいひながら甚だ遺憾の極みであつた。此の點、吾が播磨楢吉氏が善隣協會に在つて絕えず蒙古史研究に關するロシア資料を翻譯紹介せられてゐたことは、其の功績